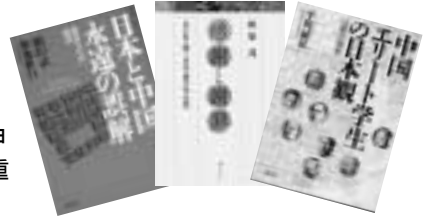


中国のほんの話(40)

日本人と中国人の相互理解のために

蔭山 達弥



連日テレビのニュース番組やワイドショーで、センセーショナルに報道される「冷凍ギョーザ事件」や2月17日、中国重慶五輪センター体育場で開幕したサッカーの東アジア選手権、日本対北朝鮮戦で日本の国歌斉唱中に激しいブーイングが起きたことなど、日中両国の国民感情にある深い溝を改めて思い知らされる憂慮すべき事態が再燃している。

このような日中間の感情的対立の原因が、両国間の言語感覚・文化の違いにあることを実証したのが稲垣武・加地伸行両氏による対論『日本と中国 永遠の誤解』（文藝春秋、1999）である。稲垣氏は「日本人と中国人ほど、相互に理解しあうのが困難な組み合わせはない。誤解から生まれた文化摩擦や衝突が繰り返されると、それは一種の近親憎悪にエスカレートする。それを防止するためにも、幻想を排して中国と中国人をありのままに理解しなければならない。この本がその錯誤防止の一端となれば幸いである。」と、本書のオビで述べている。本書の第三章「なぜ日本人と中国人は相互理解が困難なのか」を読めば、例えば金銭に対する考え方一つをとっても、日本人と中国人は根本的に違うことがわかる。「日本人は、おカネは大事なものだ、しかしもっと大事なものがあると言いたがる。しかし、中国人はそうは思わない。その大事なおカネを使って勉強をして、さらに次のことを行うことがより大事だと考えている。…中国人は「名」と「実」のうち、「実」しか信頼しない。中国人は心を籠めてだけではダメなのです。モノを添えなくてはダメ。そこが、日本人の発想とは根本的に異なる。」（加地）

今回の「冷凍ギョーザ」の製造元の工場長の記者会見を見ても、わかるように中国人は他人の批判を全く受け付けないし、自己の過失は全然認めない。自己主張以前の自己保存本能が強い中国人に対し、自虐趣味というか、身も心も捧げる日本人が多い。あの阪神大震災のとき、欧米系のボランティアは時間をくぎって手伝うのだが、日本人学生ボランティアは朝早くから夜遅くまで尽くすので肉体的に三日と続かず、最後には殿様気分の被災者にキレてしまったそうだ。自国を貶め（日本はひどい国だと言って）、他の国にへりくだる自虐趣味、敗戦までの過去の日本を全否定する自虐史観教育の弊害がここにも現れている。稲垣氏が言うように日本は今後、世界にも稀などうしようもない国になっていく怖れがある。

では、日本人は中国人と今後どのように付き合っていけば良いのか。加地氏が本書で最後に述べているように、中国や中国人に対し嘘偽りのない発言をし、建設的な発言をすることこそが中国や中国人に対する真の答礼になるのではないか。

中国研究が専門でない、比較文学で著名な平川祐弘氏が、北京日本学研究中心で教えた知見をもとに執筆した『中国エリート学生の日本観』（文藝春秋、1997）は、中国のエリート学生の本音が垣間見えて、両国の相互理解のヒントを与えてくれる。平川氏は言う。「大陸（中国本土）の青年で、政治の現代化が一向に進まないこの現状に満足している者がいたとしたら、そのひとはつまらない人である。相手にしなくて良い。中国の未来を担う人は現状に不満な若者たちであるからだ。彼らは、マルクス・レーニンなどは信じない。」

NHKテレビ中国語会話の講師を勤められた相原茂氏の『感謝と謝罪 はじめて聞く日中“異文化”の話』（講談社、2007）は、中国人・中国文化理解への最良のガイドンスである。日本人に対する悪口についての筆者の見解はこうである。「“日本鬼子（日本兵、日本の侵略者）”や“小日本（小さな日本、背の低い日本人）は悪口に違いないが、中国語の環境の中では、日本人が想像するほどのものではない。」

かげやま たつや（教授・中国文学）